

















































































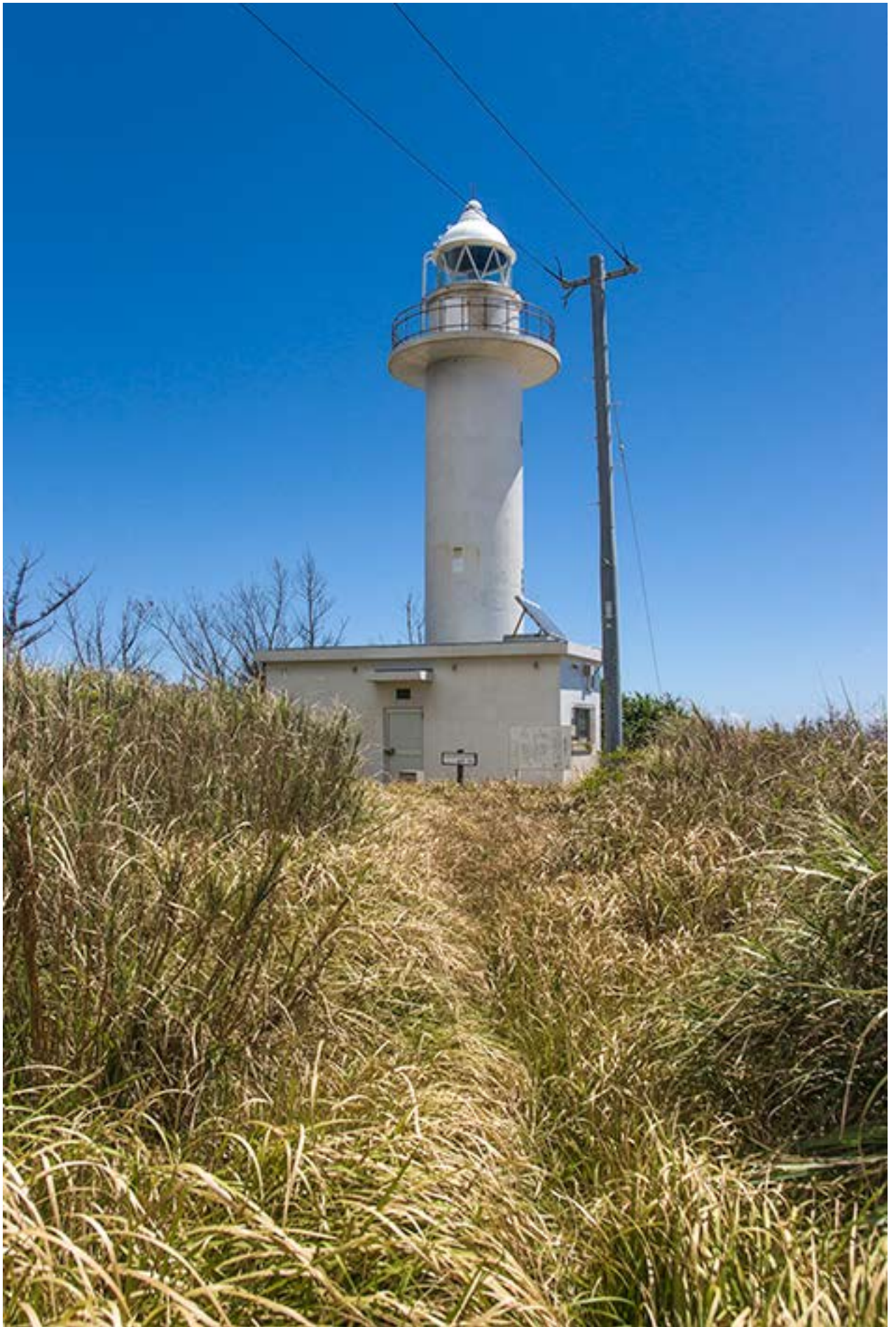




町指定文化財 (昭和51年指定)
アマンジョウ
〔与論島人類渡来発祥の地〕
与論島に初めて人類が渡来してき
たとき、このアマンジョウの水を
見し、住みついたと伝えられている。
与論町教育委員会











鍾乳洞が出来るまで

鍾乳洞は石灰岩が水に溶かされて出来た石灰岩の洞窟です。

石灰岩は海棲生物や海藻の遺骸などの堆積物からなり主成分は炭酸カルシウムです。地上に降った雨水が地表の腐葉土などの土壌を通って岩の割目に達する頃には雨水に含まれている二酸化炭素の量が一〇〇倍、二〇〇倍に濃度を増します。純水には溶けない石灰岩も二酸化炭素と雨水が結合して炭酸となった水により岩盤の割目に沿ってすこしずつ溶かされ長い年月を経て洞窟はつくられます。岩石や地表の自然環境などによって異なりますが、人が入れる様になるには一〇万年以上はかかると言われています。この赤崎鍾乳洞もおそらく一〇〇万年位は経っていると推察されます。洞内には自然がつくり上げた色々な形の鍾乳石が出来上がっております。

この鍾乳洞は昭和四〇年三月日本大学の洞くつ探検部の四名によって調査発見されたものです。

小さな鍾乳洞ですがじっくり、ゆっくり御覧になって下さい。











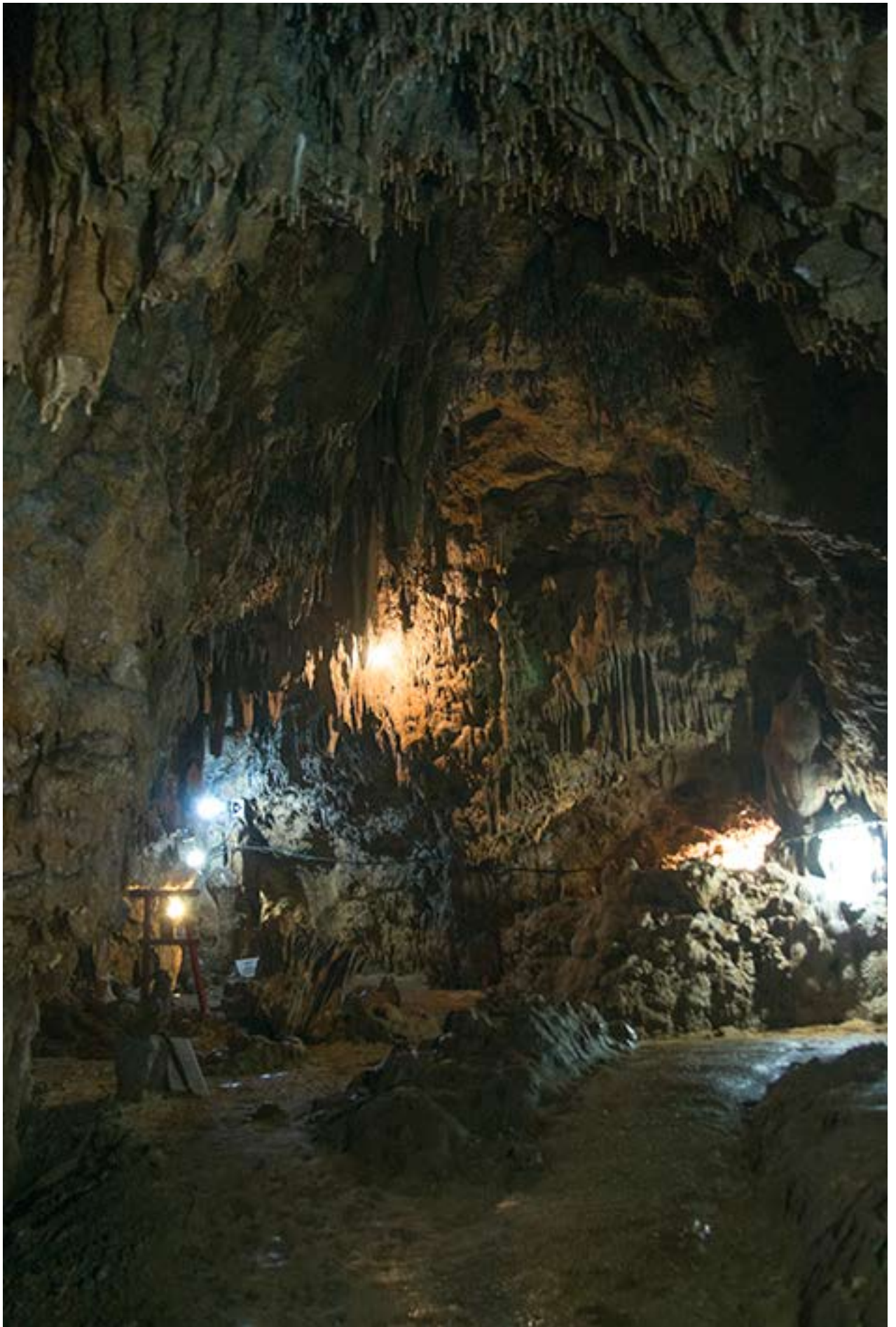


















上城跡 上城遺跡

上城遺跡は大島郡与論町東区大字妻屋アマミズに所在し、与論町役場の南東約4.3km、赤崎の燈台の西北西約700mにあり、迫状となっている部分に形成されている赤崎鍾乳洞の西側に位置する。

与論町内の遺跡は鹿児島県市町村別遺跡地名表によると、縄文時代1カ所、弥生時代以降5カ所、城(グスク)1カ所が知られている。

与論島での歴史の開始は今から約3,000年前とされている。13世紀以降は与論島は沖縄系の勢力のもとにあり、16世紀に築かれた「与論城」は琉球系の城郭であり、その形態をよく残しているものである。















































































文化庁・消防組合・地主神社
但し、線香を除く
火気厳禁

オーシヤモン ほか
王舅墓
○ 怕尼笑(ハニシ)王の子孫の三男(オウシヤモン)が眠る
琉球北山蔵と伝わり「辺後地祥所」に安葬
詳細は由緒書











按司根津栄神社の由来

奄美年表によると、第五六代清和天皇の後裔鎮西八郎が朝公が伊豆大島から琉球に赴いたと記録されている。しかし、年を経るにつれて郷愁の思いにかられた朝公は後ろ髪引かれる思いで、妻子を残して牧港から旅立った。その一行は水と食料の補給のため、ユン又島の南端の前浜に降り立った。しばし滞在した公は、朝戸の根（ニイ）の地に住む「ヌル」を見初め、やがて男の子を設けた。時は一一八〇年頃のことと推察される。それが後の按司根津栄となった。

按司根津栄は文武ともに優れ、特に弓術は父為朝譲りて、その評判は琉球の王にまで轟くほどであり、剛勇に加え、心の優しさ、民思いの心根を物語る説話も多く、語り継がれている。王は、いったん献上した妹の愛弓を取り返した。按司根津栄の武勇に恐れをなし、千人の兵を派遣したが、最後の一兵を残して全滅させられてしまった。按司根津栄はその一兵が年老いた飯炊きだったので、殺さず、「戦いはこれ以上望まぬと王に伝えよ」と命じた。その後、勝利の安堵感で赤佐の浜（ビグチ）で兜を脱ぎ、一休みした一瞬、飯炊き老人が太陽に向けて放った一矢が頭に当たり、一生を終えた（チンバ）に納められた頭蓋骨の矢の跡が、按司根津栄の無念さを伝えている。

その後、老人の報告を受けた琉球王は死を確かめるため、千人の兵を派遣したが、武装したまま直立していた按司根津栄の死体を生きているものと見誤り、混乱を来して全軍もろとも海に沈んだという（それゆえに、生きて千人死んで千人の伝説を残すこととなった）。本神社の付近には、弓こひりの跡（ウマヌクン）、沈座（チンパー）、船倉海岸の浜宿の跡、石積半田（イシユチュミバンタ）の磐跡、刀田（ハタナダ）、千人岩穴（センニンイヨー）、千人浜等史実を物語る遺跡を多く残している。

按司根津栄神社氏子一同謹書





















町指定文化財(昭和51年指定)
尾川(ヤコー)
このわさ水は古くは世之まがら
江戸時代より使用されたと伝えられ
戦前までの生活用水として使用され
ていた。またこの水は尾川のウ
シジロに湧き出ている。
尾川町教育委員会













